研究の栞

日本古建築研究の栞（第三十七回）

天沼俊一

第三十五　須彌壇及臺座（上）

須彌壇は【佛教大辭典】に

須彌壇又須彌座と云ふ、形須彌山に象り中細き臺座を云ふ。上に本尊を安置す。

とある。須彌壇も佛壇も同じものを指すのかと思つてゐたところ、定義は異るので、同書に、

佛を祭る壇場なり　俗家の居室、或は寺院の方丈に設くる佛龕を佛壇といふ。

のださうである。夫れで其二つの名稱を混同するのはよくないのは判つたが、然らば須彌壇とは、「中細き臺座」と心得るとして、扨て中が細いとはどの樣なのをいふのか、圖がないからはつきりしない。併し常識で判斷すれば、謂はゆる唐樣のものを指すらしい。さうすると例へば法隆寺金堂や、新藥師寺本堂等の漆喰塗や、藥師寺・唐招提寺金堂の等は須彌壇とはいへぬことになる。今迄はこの樣なむづかしい區別があるとは知らず、どれもこれも寺の堂の內陣にあつて、其上に佛像ののつてゐるものは、何れもかまはずに須彌壇とも佛壇とも勝手に呼んでゐたが、かうなると中々むづかしいものである。併しながら今迄は寺へいつて話しをした時も、之れで通用し

たから、專門家の間には非難があるかも知れぬが、從來の稱呼に從ひすべて須彌壇なる名を用ひておく。

それから臺座といふのは、佛像をのせる臺のことで、例へば東大寺三月堂本尊ののれる八角形で二重の臺の如きものを指したのである。あれ等は大きくすると須彌壇と同じやうになるから、同樣に取扱つて少しも差支ない筈である。然らば其須彌壇は各時代でどの樣な變遷があつたか。

飛鳥時代

當代のものはないといつて然るべきである。法隆寺金堂のは古式かも知れぬが、あの樣に內陣一ぱいに擴がつて了つては、頰返しもつかないから始末に惡い。最初はあんなではなかつた筈で、內陣柱と須彌壇との間には、相當の餘地もあつたのであらう。然るに後には遂に裳層をつけないと、儀式を行ふに支障を來す程にひろがり、遂に第三六一・三六二圖でみるやうな風になつたのである、だから當初も現在の如く漆喰塗であつたか、それとも外側の二重の石壇のやうに、あの樣な積み方をした石壇であつたか判らない。

然らば五重塔の方はどうであつたかといふと、あれも今の樣に漆喰塗の岩窟は後の仕事なのだから、以前はあの樣でなかつたこと丈けは確かである。併しこれも亦よく判らない。

故につまり當代のは判然せぬのである。

奈良時代

に入つても、藥師寺東塔以外に此時代の樣式を現はした建築物が殘つてゐないで、さうしてあの須彌壇があの樣に變つてゐるのだから、前代同樣の結果に陷るのは止むを得ぬのである。けれども先づ私は金堂の夫れを以て

前期

を代表せしめてもよからうと思ふのである。藥師寺が現位置へ移されたのは養老二年說と天平二年說とあり、私はどちらが正しいか調べたことはないが、何れにしても和銅以後だから、當然後期に入れるべきものである。あの須彌壇でも今のところで新しくつくつたものとすれば、當然後期に入れて然るべきであるが、既に虹梁のときも

扉のときも肘木のときも、科でも枝輪でも、いづれもあの東塔の夫れ等を以て、當代前期の例に既にとつてゐたのだから、同樣にこれも亦、實例の他に見出せぬ前期の須彌壇の例にとつておかうと思ふのである。

あれは全部白大理石より成つてゐる。白大理石といふことは、當時は他に類例もあつたかも知れぬが、今日にはこれ丈けが殘つてゐるのである。二重二閣の珍らしい金堂は燒けて了ひ、今のは假建築に近いやうなものであるが、本尊の臺座と瑪瑙の須彌壇とは幸に今でもみることができる。

第三六三・第三六四圖は、共にその一部分の寫眞である。其特徴ともいふべきものは、壇上積になつてゐる束石が後期あたりのに比べて著しく細いことと、羽目石と一石から刻みだしてあることゝである。斯く實例に乏しく、漸くこれで間に合せたのであるが

後期

になると相當に遺物があるから工合がよろしい。先づ第一に唐招提寺金堂の夫れを擧げる。

第三六五・六・七及第三七二・三㋺で其佛は判るやうに、これは前圖と同じく束が入つてゐるけれども、羽目石と一石から刻みだしたのではなくて、束は束で別である。さうして羽目石には一つ一つ格狹間が刻してある（第三六六圖及第三七三圖㋺）。此格狹間は寫眞では幾分判るであらうが、輪廓曲線の性質頗る強く、内に多少の膨みあり、非常にしつかりした形である。但し多くのうちには、途中で二つつき合はしたのや（第三七二圖㋩最上段右端）、半分きれてゐるのや（同下段左端）、無地のや（同同右端）いろ〳〵あるが、これは後の修理のときごうかなつたと見るべきで、要するに今となつては、これは當然當期第一流のものとなつてしまつたのである。此石の須彌壇上の木の部分（第三六五・六・七及第三七二圖㋩・㋺）は恐らく當初はなかつたので、あれは後――といつても可なり昔しであらうが――に補加したものと思ふのである。第三七二圖㋩は須彌壇の位置を示したのである。

以前奈良市興福寺金堂の裏と講堂址との間の低い濕めつたところに、恰も唐招提寺金堂佛壇の羽目石と同じやうな、強い立派な形をした格狹間をほつた薄い石が放棄

—こいつては餘りひどいかも知れぬが、事實乘てて省みない樣に、或は上を或は下を向き、或は多くの他の石の間に積み込まれたり、又は土まみれになつたり——されてあつた。其うち異なつた二種を第三七三圖(い)・(ろ)に圖示しておいた。(い)は幅も廣く底邊も一直線で、唐招提寺の夫れによく似てゐる(同圖(は))が、(ろ)はそれに比べると幅がいくらか狹いから、自然背が高く見え、殊に底邊がいくらか上に反つてゐるから、趣きは多少異なつて見えるが、曲線の性質は此三者何れも全く同一こいふことが判るであらう。此事實のみを以てみるときは、三者の時代にさう大して差がないことが誰人にも了解できやう。(い)・(ろ)共に復原圖であることを念のため斷つておく。

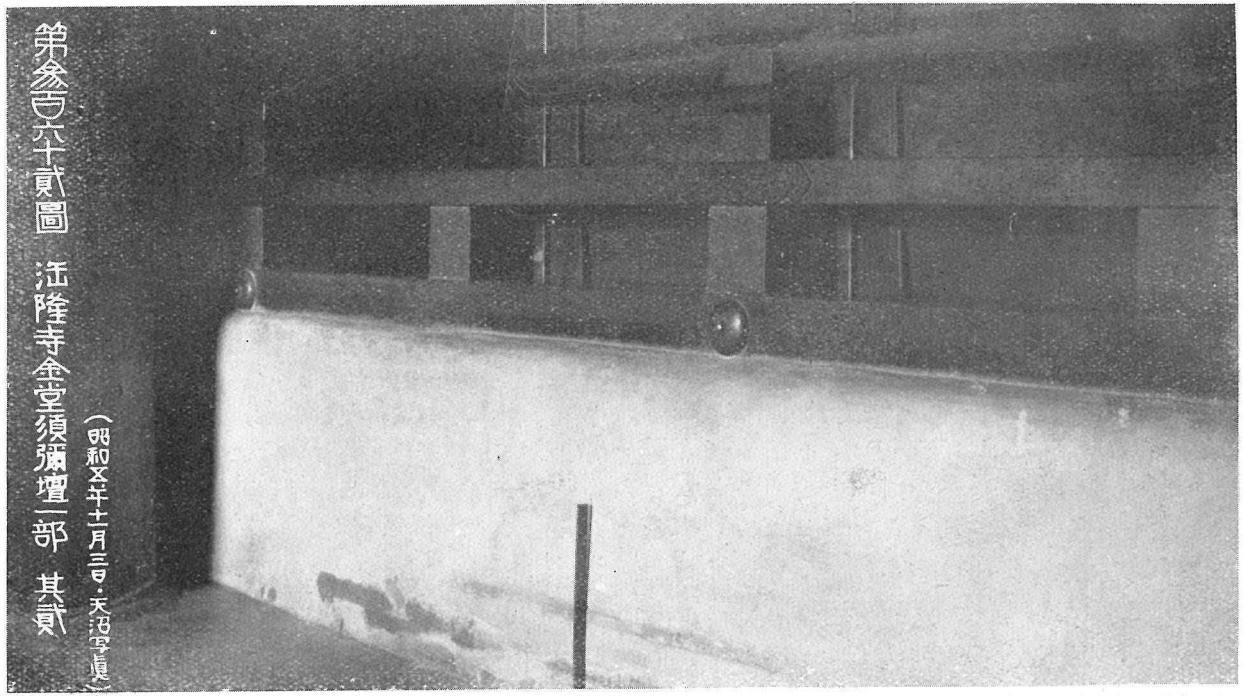
最初は七八枚もあつたやうであつたが、それが此頃になつてどこへ行つたか、今から二年位前に通りがけにみた時は、數はずつと減じて二枚位になつてゐた。現在はどうなつてゐるか知らない。何れも破片で、多くは縱に二に割れてゐたから、先づ何れも½が殘つてゐる樣な狀態であつた。斯く破片である上に、この樣なところにあるのだから確言はしかねるが、どうも當初の建物の須彌壇の羽目石の殘闕ではないかと思つたのであり、今でも尙ほさう考へてゐるのである。

何故かこいふに、あれ位大きな、あれ位立派な石は、恐らく他に使ひみちはなかつたらうし、時代も確かと推定したからである。さうしてあの樣に放置したまゝで、よく盜まれないものだと、大に餘計なことを心配した時もあつたが、寺では片づけやうこもせずにあつたのに、此頃數が減じたところをみると、賣拂つたのか盜まれたのか、貴重品として倉庫へ納めたか金堂內へ陳列したかこにかく再び得難い品であることを紹介し、全部なくならぬうちに圖示しておいたのである。

法隆寺夢殿は八角形で、同じく八角の二重壇上積石壇上に建つてゐるが、內部の須彌壇も亦同じく八角二重で地覆と葛との間に幅の廣い束石が入れてある。此壇は例の凝灰岩樣石材から成り、上に漆喰が薄くかけてある。今は側面に丈け殘つてゐて、上端には全くないが、昔しはどうなつてゐたのか、また其色は現在の如く初めから

第參百六十壹圖　法隆寺金堂須彌壇一部　其壹（昭和五年十一月三日・天沼寫眞）

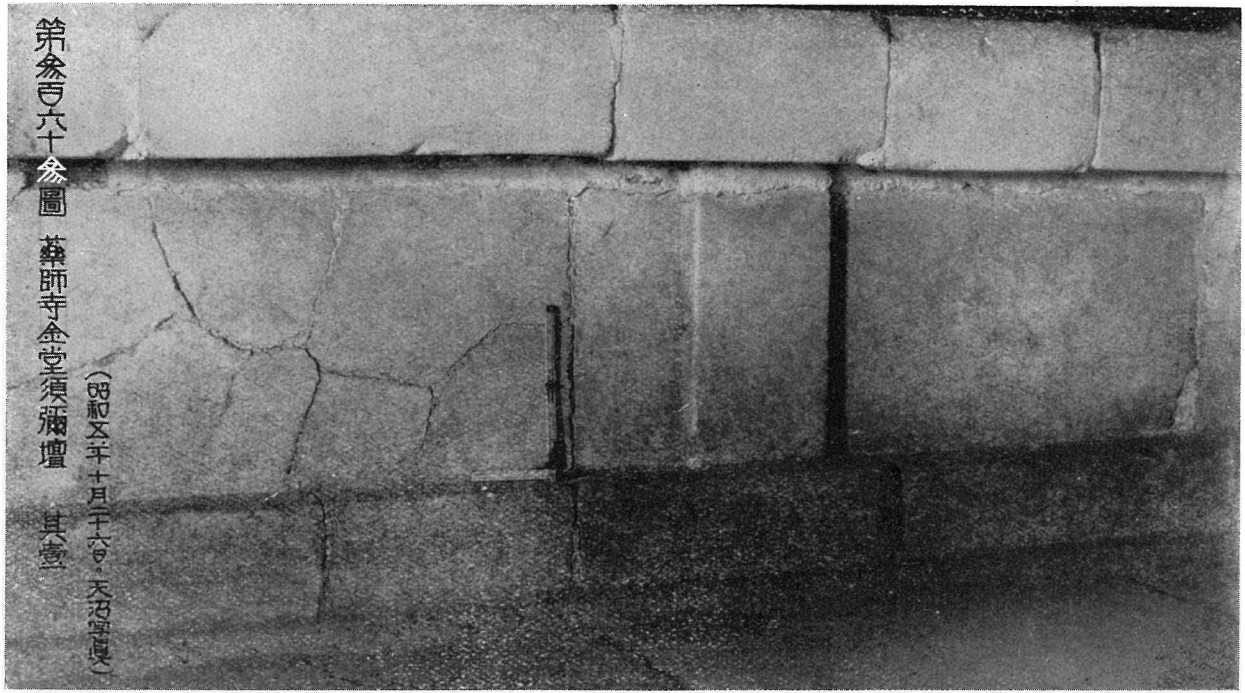
此れは西側の一部を北を向いて寫したところ。寶珠柱は西北隅のである。此頃拜觀人のつまらないいたづらを防禦するため周圍に木柵をつくつてしまつたので、この樣なのほかできない。



第參百六十貳圖　法隆寺金堂須彌壇一部　其貳

（昭和六年十一月三日・天沼寫眞）

前記の木柵は，幸ひに正面の一間だけはできてゐないので，そこだゞ幾分都合よくされる。圖の向て左方，文字の書いてあるあたりは柱で，其影が漆喰のゝころに寫つてゐる。この寫眞からでも，壇が内陣一ぱいの事が判るであらう。（圖の中央に立つは、下が少し切れたが、曲尺の一尺）

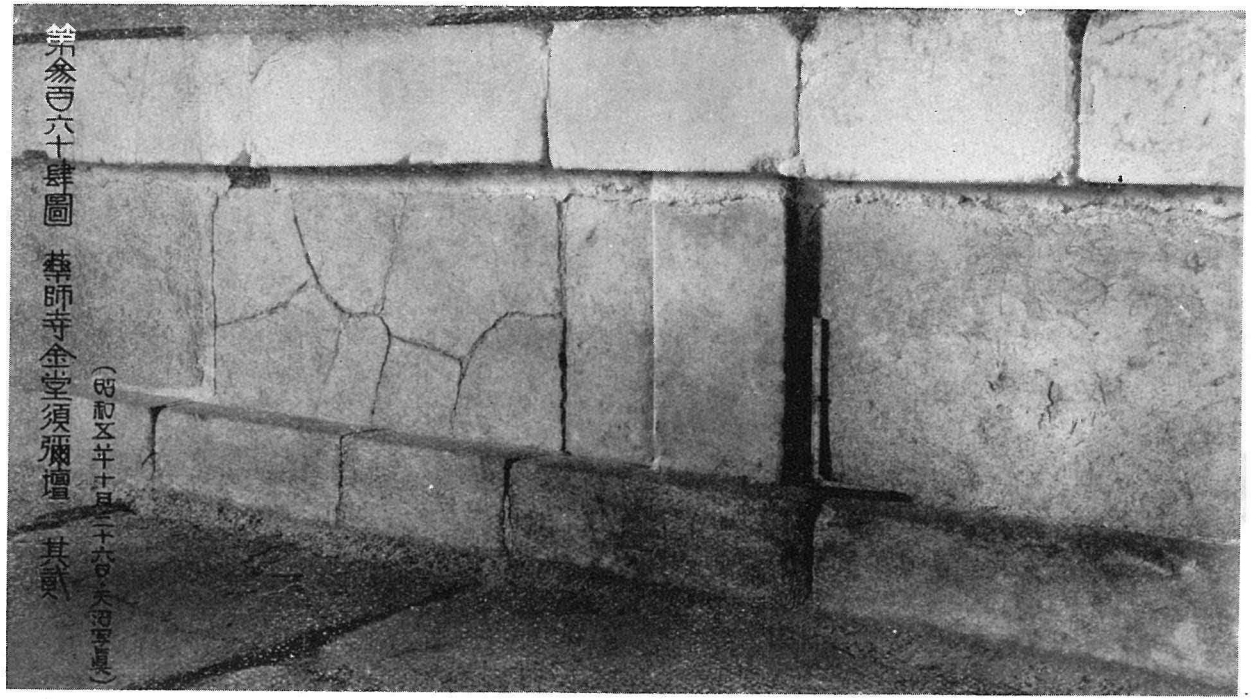


第參百六十參圖　藥師寺金堂須彌壇　其壹

（昭和五年十月二十六日・天沼寫眞）

藥師寺金堂須彌壇の東側を斜右にみたところ。地覆・葛及束石との關係に注意せよ。束が割合に幅狹く出も少なく羽目石と一つの石から刻みだされてゐることは，次時代からなくなつたやうである。

束石の左に立つは曲尺約五寸に當る（六吋）。

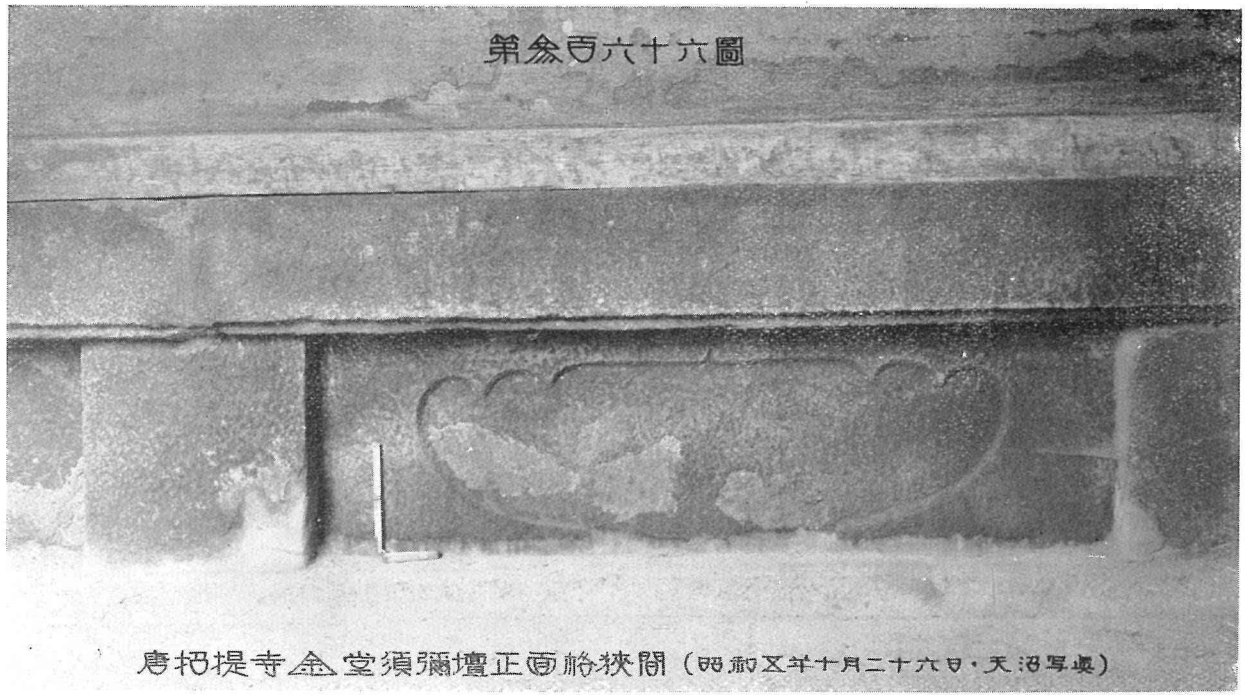


第參百六十肆圖　薬師寺金堂須彌壇　其貳

（昭和五年十月二十六日・天沼寫眞）

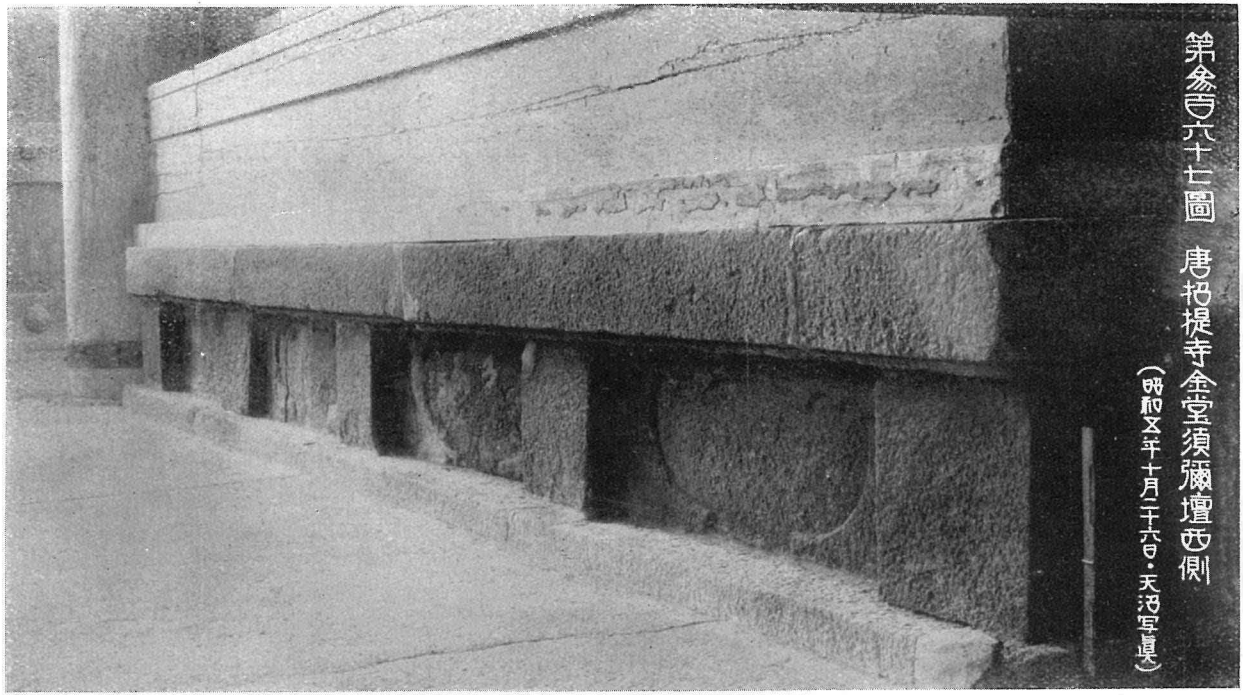
前回と同じところであるが，それを斜左にみたところ。白大理石の石壇はここにほか，殘つてゐないから，甚だ貴重なものである。束の右に立つは曲尺の約五寸（六吋）。

金堂須彌壇正面の一部を斜左をむいて寫したもの。束の出が多くなつたこゝと，葛石の下端に直角に切り込んだ小さい面のできた事を看過してはならぬ。最右端の束の右，地覆石の上に立つは曲尺の約五寸(六吋)。



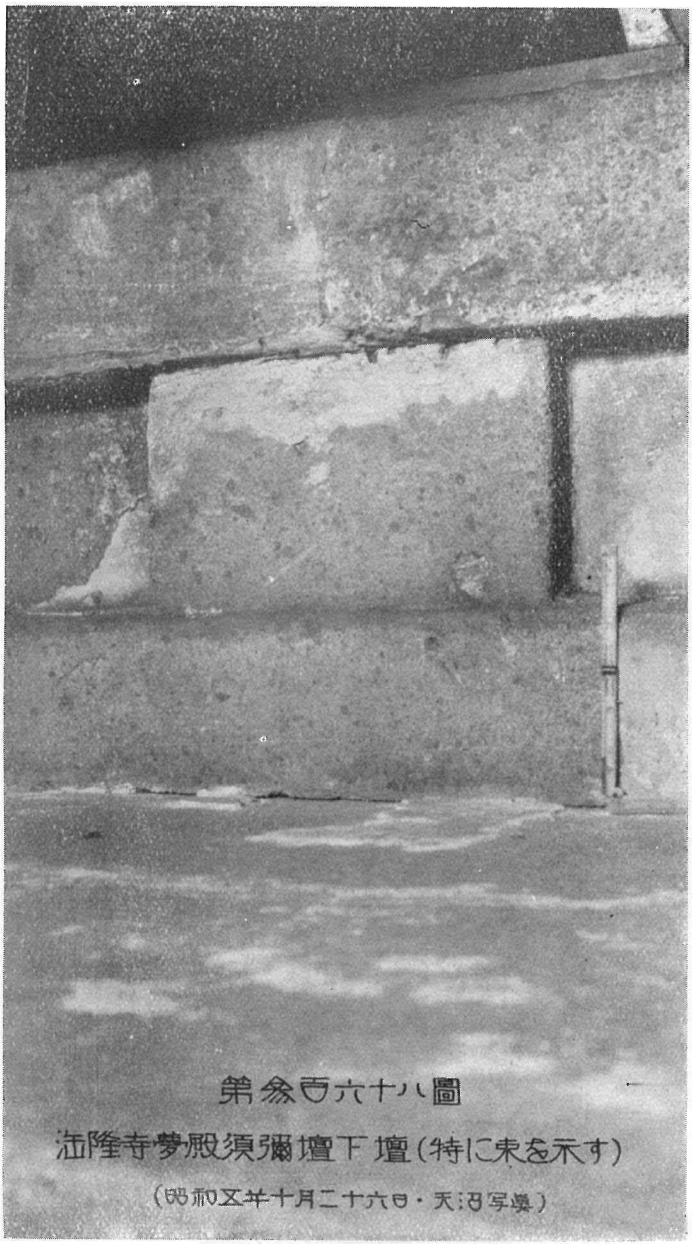
唐招提寺金堂須彌壇正面格狹間（昭和五年十月二十六日・天沼寫眞）

上圖と同じ位置で，羽目石の格狹間一個丈けを大きくしたもの。尙束石の幅さか大變に廣くなつたことに注意をし，且つ第 372、373 圖と比較せよ。左束石の左に立つは曲尺の約五寸(六吋)。



第參百六十七圖　唐招提寺金堂須彌壇西側
(昭和五年十月二十六日・天沼寫眞)

須彌壇西側全景である。下前及前前圖にも一部分見えてゐるが，此圖に最もよくでてゐる須彌壇上の木部は，後世の補加と考へられる。右端に立つは曲尺の一尺。

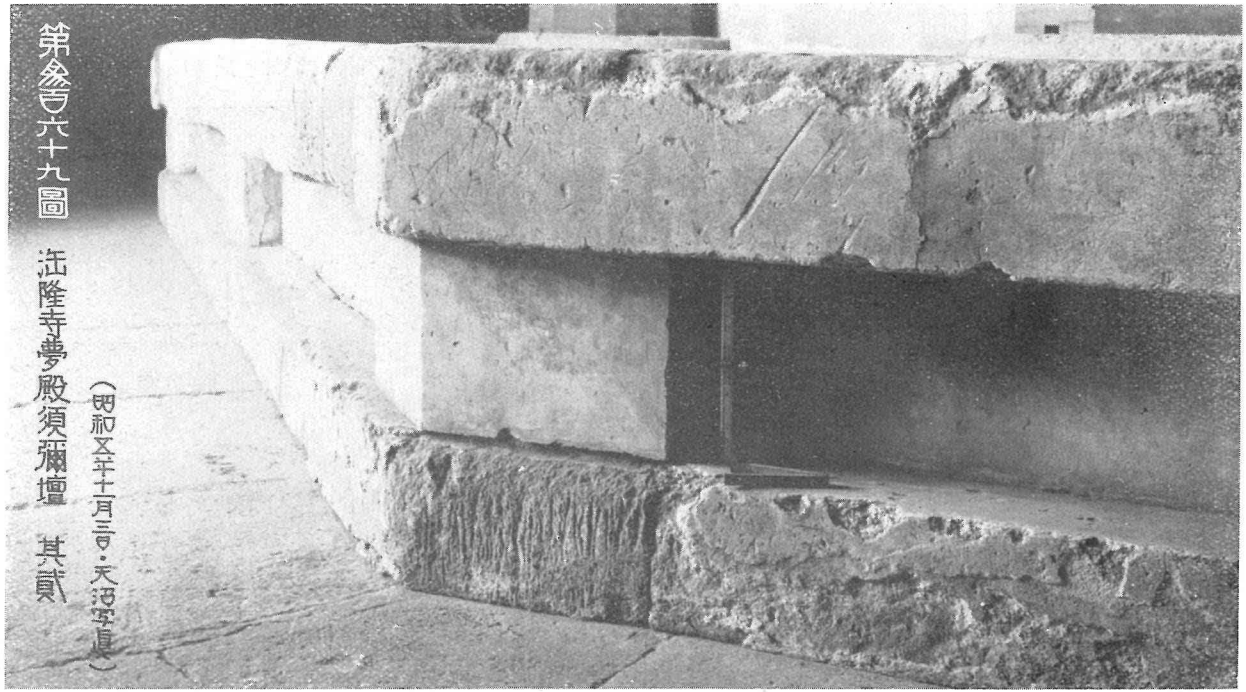


第參百六十八圖

法隆寺夢殿須彌壇下壇（特に束を示す）

（昭和五年十月二十六日・天沼寫眞）

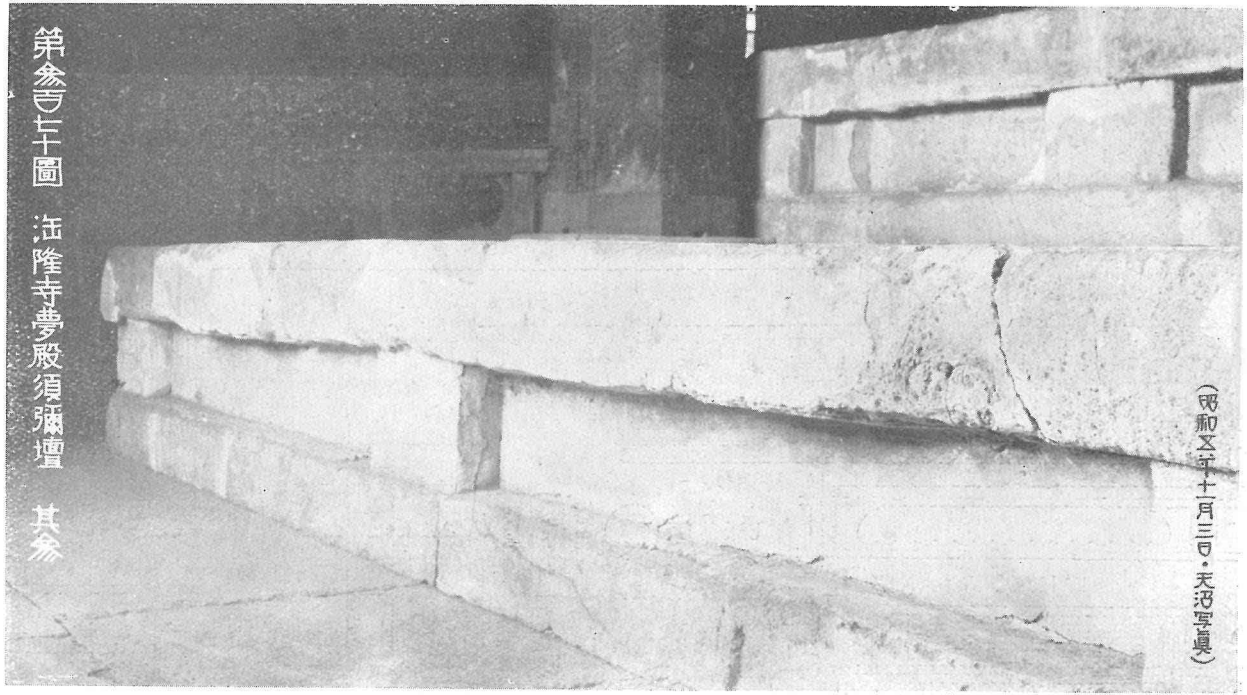
束石の愈幅が廣くなり、唐招提寺の場合は正方形に近いから左程でもなかつたが、この場合は幅が高さより多くなつてしまつた。其右に立つは曲尺の約五寸（六吋）。



第參百六十九圖　法隆寺夢殿須彌壇　其貳

（昭和五年十一月三日・天沼寫眞）

同上の隅束をみせたもの。束の右に同じものさしを立つたのであるが，影になつて眞黑になり，折角のが見えなくなつて了つた。床の石の敷き方も，一部分が見えてゐる。



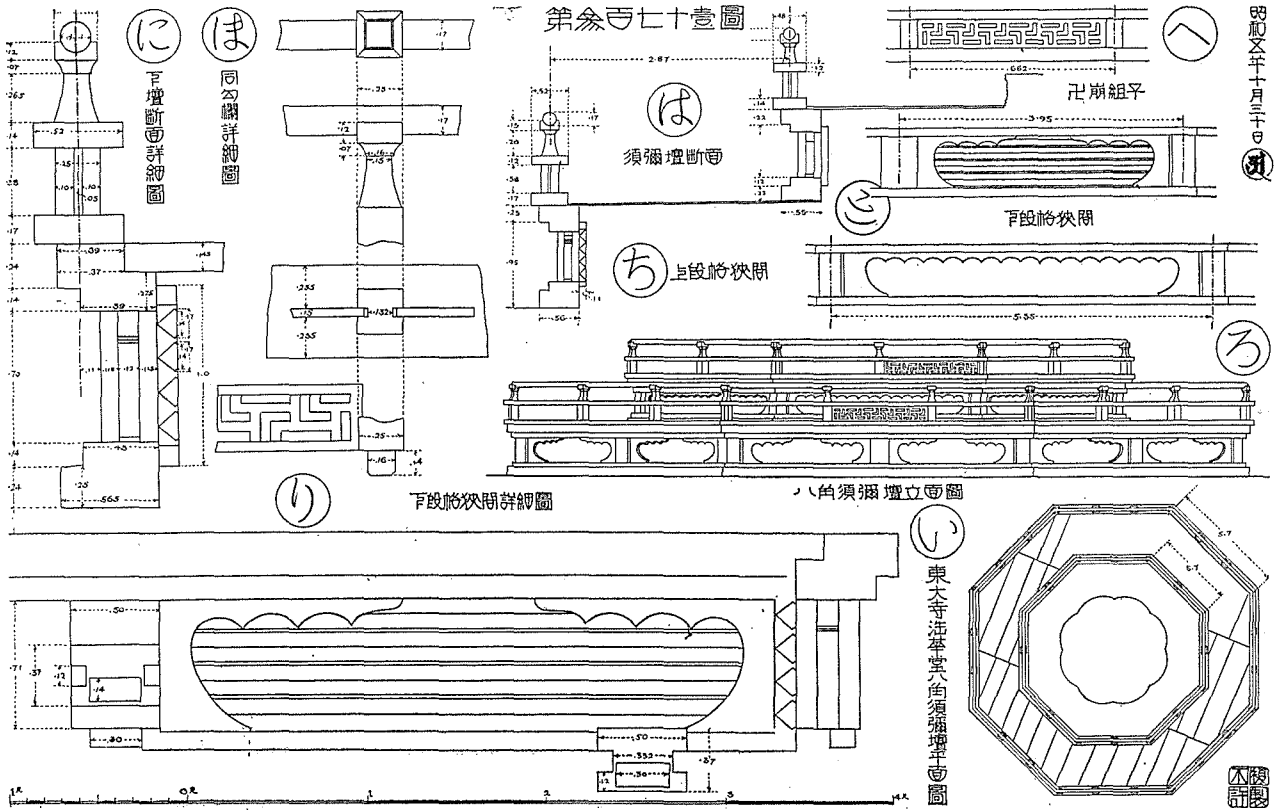
第參百七十圖　法隆寺夢殿須彌壇　其參

（昭和五年十一月三日・天沼寫眞）

上壇及下壇の一部を示したもの。場所が狹いのと，其割に壇が大きいのと，私の寫眞機が高價のでないためこれ位ほか寫らなかつたのを遺憾とする。

昭和五年十月三十日　刊

第參百七十壹圖



第參百七十貳圖・唐招提寺金堂須彌壇之圖

昭和五年十月二十九日・木曜・晴

須彌壇平面圖

同斷面圖

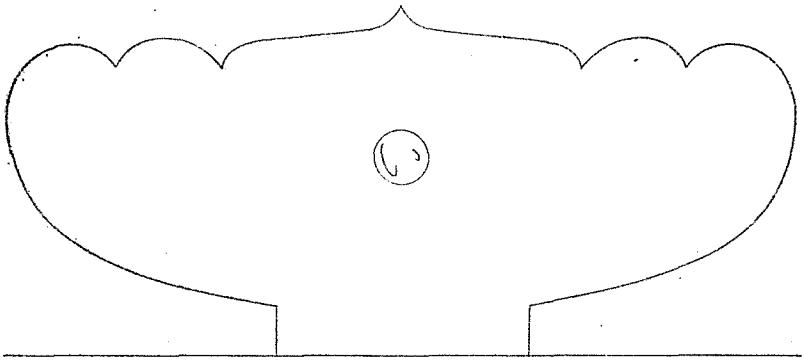
金堂須彌壇正面圖　下圖右端●印のある線交點は，上圖左端●印のと同一のもので，即ち正面の全長は總て十間である。

金堂須彌壇西側面圖

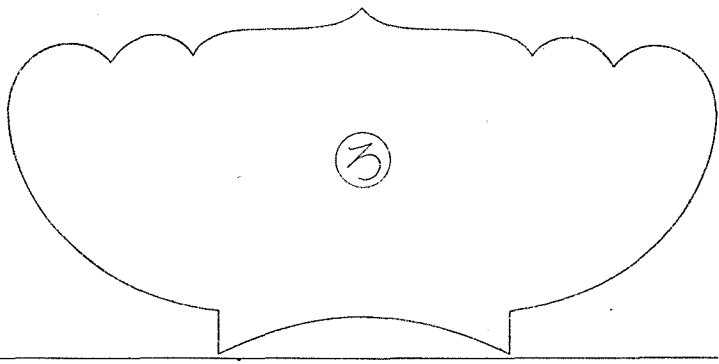
同東側面圖

第參百七十參圖　奈良時代須彌壇格狹間參種

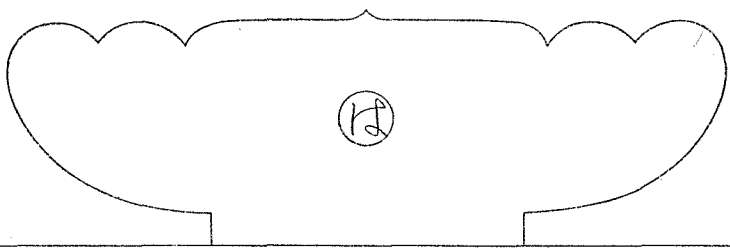
許不　　昭和五年十月十三日印刷　　複製



奈良市興福寺金堂裏にあつた格狹を刻した古い石。恐らく當初の金堂須彌壇羽目石であらう。復原圖。　共壹。



此も同所にあつたもので，僅かにさく戸の形も少しく異なるが，同一の場所に使用されたものであらう。復原圖。其貳。

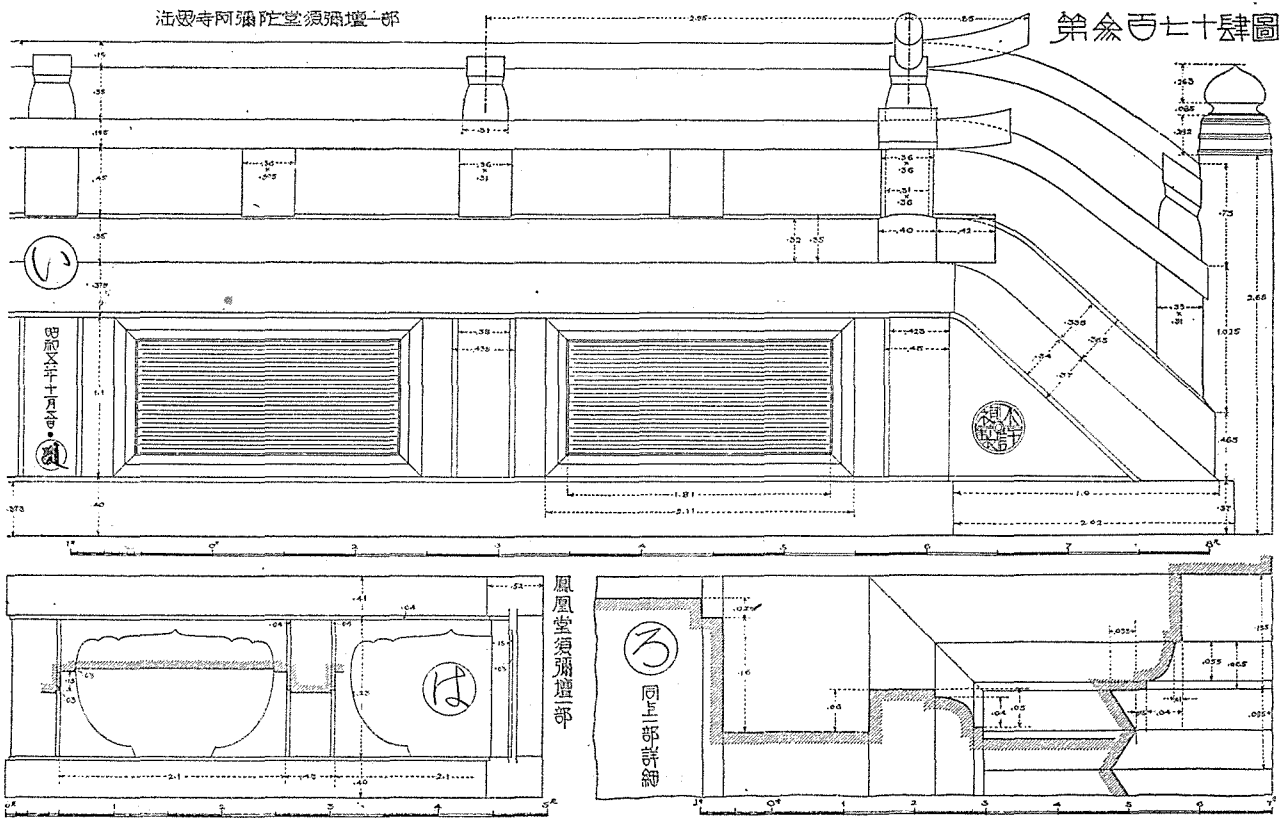


唐招提寺金堂須彌壇羽目石格狹間の意。以上參個の格狹間は，其曲線の性質が同一であるのが判るであらう。

縮尺

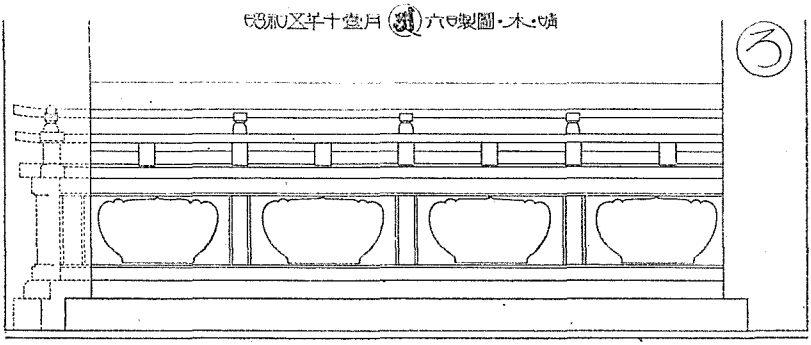
第參百七十肆圖

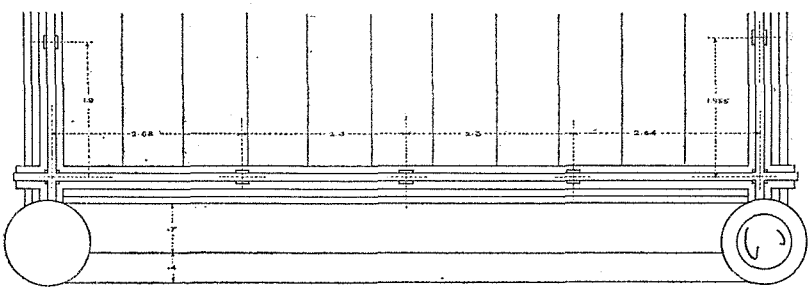
法隆寺阿彌陀堂須彌壇一部



第參百七十又圖・大分縣西國東郡田染村・高貴寺大堂須彌壇

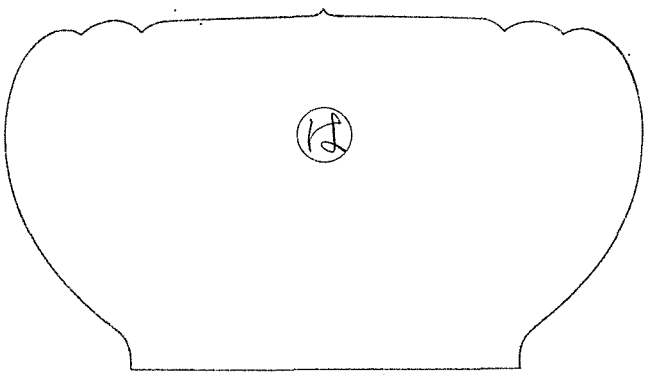
昭和又年十壹月　日製圖・木・六日





高貴寺大堂須彌壇正立面及平面圖

縮　尺

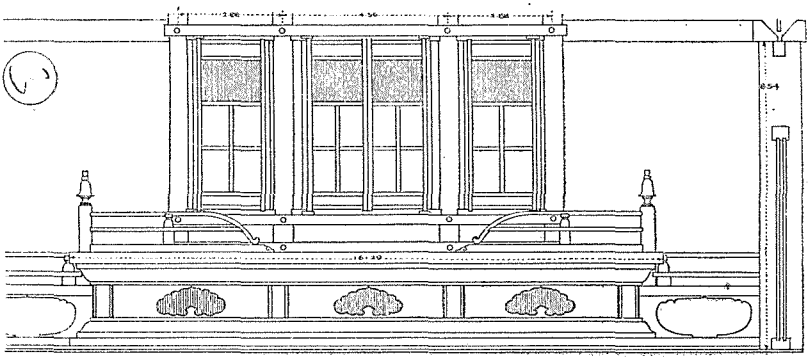


同羽目板格狹間詳細圖

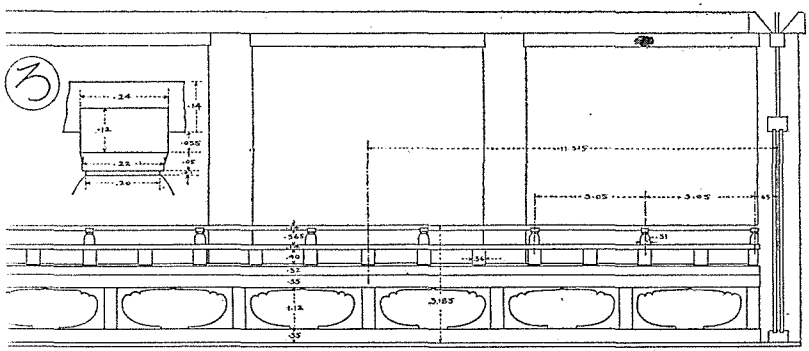
縮　尺

●●複製●●　●●許不●●

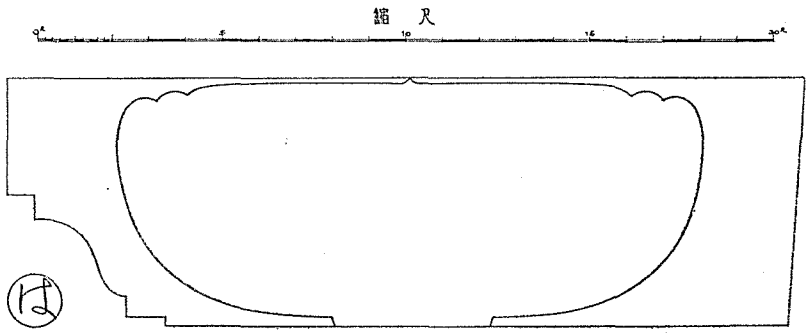
第參百七十六圖・高知縣長岡郡西豐永村寺内・藥師堂須彌壇



修理前のもので，もい須彌壇を取拂ひ，江戸時代の樣式にて屋根をも新調し，僅に舊壇の一部分を其左右にのこしたもの。



其殘つた部分により，正面全體を六つの等間隔に分ち，新壇及屋根を取去り，原形を推定して復原したもの・修理後。



修理前新壇の左方に殘れる羽目板，左方下端の曲線は新壇下方の線形にあはせて板を切取つたためにできたものである。

白かつたか、或は何か色でもつけてあつたか、其邊のことは判らぬが、とにかく八角二重の壇上積の須彌壇であつたことは明らかである。第三六九圖には其一部主として東石を、第三六八圖には其一部主として上下壇の一部を示しておいた。

今の夢殿の建つてゐる石壇は、上端の大部分と側面及階段の全部は花崗岩になつてゐるが、あれは當初からではなく、恐らく内部の須彌壇と同質の石材であつたのがいつかひどく破壞したので、漸く上端の敷石の一部を殘して、あとは修補したものであらう。其せいかどうか知らぬが、東石などは内部のに比べて、割合が幾分細いやうである。高さの相違といふことも、勿論考へに入れねばならぬが、東の太さなどといふことも、知つておかねばならぬ事の一つである。ついうつかりしてゐて失敗した例があるが、それは後に述べることにする。

此時代に於いては、何といつても其後も立派であつたのは、東大寺大佛殿のであらねばならぬ。現在のは單に花崗岩を以て八角形に積んだ丈けであるが、昔しのは大したものであつたらしく、八角形らしい割合に薄い壇の上に、「白石の座」と稱する花模樣をほつた立派な蓮座があつた。但しあれは蓮花だから佛像に屬すべきもので、須彌壇では勿論ないが、あれを臺座として取扱つて少しも差支ない筈である。【大佛記】に

石坐高八尺、上周三十四丈七尺、基周三十九丈五尺

とあり、【東大寺要錄】また同樣の寸尺を揭ぐ【信貴山緣起】に圖するもので、大體の見當をつけられるであらう。「白石」といふのは、ある石の上に白漆喰の如き、ともかくも白い色を塗つたゝめにいつたのか、まさかに白大理石ではなかつたらうと思ふが、どうかしらない。右緣起の複製から更に複寫して圖にするつもりのところ、到底不能なので見合はせにした。

八角の序に東大寺三月堂本尊の八角臺座（須彌壇といつてもいいと思ふ）を紹介しておかう。第三七一圖⑮・⑬に於いてみる如く、これも亦二重の壇より成り、下壇側面の格狹間（同圖⑬・㉓・⑪）は其頂點が中央に於いて會せず、離れてゐること玉蟲厨子臺座の如くで、其内に横連子四本を入れ、上

重のは其上端が擺線形を連續させたる樣に、茨が總數十五竝んでゐる特別の形のもので、これは內部に連子を入れず、裏から板がはりつけてある（同圖ろ）。此上下段側面についてゐる樣な格狹間は、正倉院御物の工藝品に於いて普通に見出されるが、この樣な殆んど建築の細部としてもいい樣なところに用ひられた例は、現今では法隆寺西圓堂本尊藥師座像臺座のより他に殘つてゐぬやうである。

さうして此臺座には、撥型の料束をもち、平桁と地覆との間に卍崩の組子を入れた有名な勾欄がついてゐるのであるが、今こゝでは勾欄には觸れないでおく。（同圖ろ・は・に・ほ）

新藥寺本堂のはまことに珍らしいもので、直徑約二十九尺の圓形である。法隆寺金堂のと同じく全部漆喰塗で側面と上端との境は圓味を帶びた仕上にしてある。勿論これは當然のことで、直角に出會はせたりすれば、直に角が缺けたりするから、撫角にするより他はないのである。

此壇が初めから圓くて漆喰塗であつたかどうかは、實は未だ調べたことがない。併し本尊が藥師如來だから、それに附屬の十二神將をして、最も有效に本尊を守護せしめるのには、圓形壇にしたものはない。あの塑像の傑作が十二躰（例へ一軀後補とはいへ）放射形に外を向いて立つてゐるところをみては、如何なる惡魔外道も入りやうがない。夫れといふのも元は壇が圓いからで、其點に於いては洵に天下一品である（尤も圓いのなら、この他に木製で且つすつと小さくはあるが、播磨の淨土寺淨土堂及山口市瑠璃光寺五重塔にあるから、少なくとも天下一品とはいへないかも知れぬ。此等の壇に就ては更に後に述べる事にする。）。

奈良時代の建造物のうち、例へば門の樣に須彌壇を置かないものを除き、其他のものを調べてみると、法隆寺食堂・傳法堂・唐招提寺講堂・海龍王寺西金堂・當麻寺東西兩塔・榮山寺八角圓堂等で、此等の須彌壇は全部當初のものではない。だから問題にならぬ。最後の榮山寺八角圓堂のは、奈良式には違ひないが、あれは明治の末年大修理のとき、東大寺三月堂のを參考したといふよりは寧ろ其まま失禮して、內陣柱の間に新しく造つたもので、修理前のは江戶時代の極く新しいのが後面に高く設けてあ

つたのである。こんな風だからあの須彌壇は、奈良式ではあるが、推定復原に過ぎぬのである。故に當代のは長方形一重（唐招提寺金堂）又は八角形二重（法隆寺夢殿）で、壇上積の如く葛・地覆・束石を備へ、羽目石には雄健な格狹間を刻した時もある。內陣が正方形のときは、其柱間へ壇を設け、勾欄は柱にとりつけたやうである（榮山寺八角圓堂）又稀に圓形で漆喰塗のもあつた（新藥師寺本堂）。臺座は大規模の蓮花及反花を用ふるときもあり（東大寺大佛殿）、又八角二重の頗る精巧なものもあつた（東大寺三月堂）。臺座は木製又は銅製の場合あるも、床が石又は瓦敷であつたから、須彌壇は石造又は漆喰塗であつたやうである。

のである。次の

平安時代前期

に屬すと認められてゐる建物は、今のところ總計四棟で、其內東大寺本坊經庫と延曆寺相輪樓とには須彌壇がないから、此二棟を除くとあとに二つ殘る。其二つは室生寺金堂と同五重塔とである。

然るにこれ等二棟のうち、金堂にはあるにはあるが、これも亦明治四十一年の修理の時、それ迄江戸時代の大きな厨子があつて（寛文十二年のものと思ふが）、中は眞暗で何も見えなかつたのを取除き、新に推定復原したものである。今でもあるかどうか知ないが、近所の大藏寺（吉野郡上龍門村、距松山町約一里）にあつた石の露盤についてゐたものから造り上げたので、あれで平安前期だ位に心得てゐたところ、格狹間の形はがまんするとしても、束が細すぎて到底あれではいけない。併し今更どうすることもできぬ。あのままにして永久に恥を公衆の前に晒しておかねばならぬのは甚だ苦痛であるが、自身研究不足の結果あの樣な失敗をしたのだから、止むを得ず我慢しておくが、萬一あれがあの時分の型であるとでも思ふ人があるといけないから此所に其由を明記しておくのである。

五重塔のの方は實は餘り小さくて、上下に框がある丈けのこと、いはば模型のやうなもので、さう參考にならない。

さうすると、つまり平安初期のは、いい實例がないことになる。延曆寺講堂などは、內陣は石敷だか須彌壇は

木造である。併しあれは寛永のときので、當初は石造であつたらうが、其形は今よく判らない。けれども

後期

になるといくつか殘つてゐる。京都の近所で最も完全な例は、法界寺阿彌陀堂のであらう。改めて述べる迄もなく平安時代に入つてから木で床をはる樣になつたから、自然須彌壇も木になつたのであらう。大理石のやうな物だと、隨分丁寧な仕事ができるから、相當込み入つた形のもあつたらうが、花崗岩ではさうは行かない、ところが木となると、一層細かい仕事は自由自在であるから、中々いいものができてゐる。

第三七四圖㋙・㋚は其須彌壇の圖である。大きな方一間の內陣に、大きな木製のがおいてある。上下框の間、適當の間隔に束を立て羽目板には盲連子が(横に細かく)入れてある。かく建物の下方に連子を用ひてあるのは、前に圖示した三月堂本尊臺座の下壇格狹間內位のもので、この樣な細かい盲連子が、かゝる所へ現はれたのは、恐らくこれ等が古い方であらう。何にしろ遺物ではこれが初めてで、其後かかる種類のは可なり流行をしたのである。

第三七四圖㋛は鳳凰堂のである。元は立派な螺鈿入であつたが、全部盜み去られたため、今は虫喰のあとの樣になつてゐる。さうして羽目板の格狹間の內には、新しく延寶年間に、牡丹に唐獅子を刻した金銅板を入れてあるから、そればかり見ると甚だ新しくて要領を得ぬが、其實其輪廓は洵に美事で、當初のものであること、單にこれから見た丈けでも確かである。

第三七五圖は此に似たものであるが、富貴寺大堂のである。此は內陣が正方形だのに、須彌壇は少しく前後に平たいから、內陣正面の二本の柱と壇の正面とは少しく離れてゐて(㋙)、そこのところの梯が他と少し違ふし(㋚)、其上羽目板の格狹間が特殊だから(㋛)、見たところ大分變つて見える。柱と柱との間にもつていけば平凡になるが、ほんの僅かの注意で、正面のところに全く獨創的意匠をだしてゐる。

中尊寺金色堂のは金銅孔雀入の最古の形で、この他に迦陵頻伽入の美事なのもある。これ等は大概の人が知つ

てゐるのだから、別段圖を示さないでもよからうと思ふ。

＊　＊　＊　＊

往正極樂院本堂卽ち大原の三千院本堂のは特別に低く漸く外陣と框一本丈けの差である、だから先づ後世の住宅上段の間や床の間等と同じ樣なものである。黑漆塗螺鈿入の美しいものだが、勿論當初のではないらしく、新補らしい。其際前例によつたものか、或はさうでなしに勝手にあの樣なものを造つたのか、其邊は判然せぬが、とにかく珍らしいものである。螺鈿は平安調を帶び、可なりよくできてゐるから、後補にしても相當腕のある人の仕事であらう。

＊　＊　＊　＊

第三七六圖は高知縣長岡郡西豐永村字寺內の藥師堂のである。此頃は立派な橋もかかり、定期の自動車が運轉してゐるとかきいたが、今から二十餘年も前は高知市から人力車で漸く行つた位で、途中川を渡るのに橋がないため、人力車も渡船に積んで對岸に達する有樣であつた。今日朝鮮で自動車ごと船にのる樣に。

藥師堂は仁平元年(?)といふことになつてゐるが、古文書もなし墨書銘もなし、須彌壇安置の佛像の躰內銘によつたものらしい。佛像は三體ある（釋迦・藥師・彌陀）が、銘のあるのは釋迦で、私の古い手帳に控えてあるのを參考のためかいてみると

貢上歲六十僧勢順　□□仁平元年八月四日

歲五十僧嚴祐　仁平元年八月四日

歲卅女佐伯氏　仁平元年八月四日女佐伯

貢上歲卅僧相明　仁平元年八月四日

とあつて、此二行目から四行目にかけて其下に

仁平元年八月四日辛未日八木女（八月四日は辛未に當るからこれは見誤りではない）

貢上歲卅八木包利女木氏　仁平元年八月四日

貢上歲卅佐伯依次

とかいてあつたらしい。此は明治四十三年九月十九日に寫したもので、大分古いことだから、第一行目の□□なぞ、今ならよめるのかも知れぬし、またここに字らしいものがあつたか、夫れとも何か見誤つたかも記憶がない。

考古學會編輯の【造像銘記】（一頁）（七十）と大分の相違があるが私の方がたしかだといふ丈けの自信もない。

須彌壇と墨書銘と何にも關係がないのに、この樣に脫線せぬでもいいが、これはいくらか何かの參考になると思つたから、此機會にのせておき、元に戻ることにする。

扨て其須彌壇であるが、當初立派なのがあつたにも係らず、寬永年間に極めて拙い唐樣の須彌壇と勾欄とをつくり、同時に厨子もつくつて其内に佛像を入れて壇上に安置したのであつた(㉕)。然らば最初の上等の須彌壇はどうなつたかといふと、幸なことには新設のの左右に漸く科束と格狹間つきの羽目板が一枚づゝ殘されたため(㉕の兩端を見よ)、全部復原することができたのであつた(㉖)。

羽目板の格狹間は、圖でみる如く大きくて變化があつて(㉗)、優美にして力强い曲線である。唐招提寺のなどはあれは、あれで中中いいし、三月堂のは三月堂ので又申分はない、けれども此は此で又第一流といへる。江戸末期や明治大正昭和のブクブクに脹れ上つた肩の下つた間の拔けたのでない以上、どれでも皆夫れ〳〵の特徵があり、どれでも皆氣に入るのだから致し方がない。

＊　＊　＊　＊

先づ大體これ位なもので、大概きまつてゐる。他の當代の建物のは、全然後世のものであるか、或は須彌壇の不用の建築であつたり、或はさう異つてゐなかつたり、別に圖示するには當らぬと思ふ。そこで當代のは大體左のやうに思はれる。

床を拭板敷にする樣になつた結果、前代迄の石造須彌壇は多く木造になつた。從て素色の場合と漆塗の場合とできてきた。羽目板にほり込まれて格狹間は餘程優美精巧になり、其内部の膨みも前代のやうに多くなくなつた。また羽目板に盲連子を入れたものができてきたし（法界寺阿彌陀堂）、時としては床と僅に框丈けの差あるものもあつたやうである（往生極樂院本堂）。

（昭和五年十二月一日稿了）